

ことばのくすり

感性を磨き、
不安を和らげる33篇

稲葉俊郎 著

大和書房
1650円 / 208ページ

Profile

いなば・としろう

1979年生まれ。医師、医学博士。軽井沢病院長。山形ビエンナーレ2020、2022芸術監督。東京大学医学部附属病院時代には心臓カテーテル治療や先天性心疾患を専門とし、夏は山岳医療に従事。西洋医学だけでなく伝統医療や民間医療なども修める。



現代医学と伝統医学を歩き来 「あわい」に立つ医師の言葉

評者・校正者 牟田都子

長

野県・軽井沢病院の
「おくすりてちょう」

は、処方された薬を記録する目的で配布されている小冊子とはやや趣を異にする。一冊一冊すべて異なる表紙デザインに、シリアルナンバーが刻印され、同じものはない。中は白紙だ。

心を動かされたことばを書き留め、折にふれて読み返すことで「言葉薬を良薬のように服用してほしい」という思いを込め、地元のデザインブランドとの協働で制作された。

本書はこの「おくすりてちょう」の発案者であり、同病院長を務める著者による、ことばをテーマとした33篇からなるエッセイ集である。

著者は長らく東京大学医学部附属病院に勤務し、心臓の緊急治療に従事していた。直径わずか0・3ミリのワイヤーを操作し、心停止時には、1秒をさらに細かく分割するような時間感覚の下で救命処置を行う仕事だ。

そのために「東洋医学の考え方」に基づき「集中と瞑想

の力を鍛錬することで、身体パフォーマンスを上げる道を追求してきた」と語られるのは興味深い。西洋医学の最前線に立つ医師が、東洋医学の知見を参照しているというのだ。

本書では「あわい」ということばが印象的に用いられる。物と物が交わり、重なる場所が「あわい」だ。

現代医学と伝統医学を自在に行き来し、音楽家・大友良英との共作をはじめ数々の著作をものして、「みちのおくの芸術監督としての顔も持つ。そんな著者自身が、肩書きに収まりきらない、「あわい」に立つ者だといえる。

「みずから」と「おのずから」の「あわい」という一文がある。「自ら」は「みずから」と読み「おのずから」とも読む。「みずから」は「始める」もの、「おのずから」は「始まってしまふ」もの。例えば著者にとって現在の役職は、他者の指名として「おのずから」やってきたものだった、苦手なこと、回避してきたことをユング心理学では「影」と呼ぶ。人はいつか影と対決しなければならない。しかし、怯える必要はない。

影の訪れは「その人自身の中で、影を受け入れる器が熟した時」なのだからと著者は言い、「みずから」新たな職を引き受ける決断を下す。

病を得るといふ表現があるが、本来、好んで病む人はいない。病はつねに「おのずから」やってくる。「本来的に不条理で受け入れがたいもの」であり、「必ず悲しみを伴う」とさえ著者は書く。

ひとたび病んだとき、人は症状とともに「悲しみ」に「みずから」相對することを迫られる。だが、医療の現場で行われる治療に、「悲しみ」に焦点を合わせたものはどれくらいあるだろうか。

医療従事者を責めているわけではない。ここでいいたいのは、人は自分自身の執刀医や薬剤師にはなれずとも、己に向かって「ことば」を処方できるのではないか、ということだ。「ことば」により損なわれたとしても、「ことば」により生まれ直すこともでき「る」のである。

一人の医師が診られる患者の数は限られているが、本という形を得たことばは時間も距離も越え、大勢の人に届く。そこに著者が本書を書いた理由もあるのではないか。